



中村俊定文庫
文庫 18
42
4



毛吹草卷中五



春

元日



此丸何もいむ海より社之のあはれ

○鶯を丹きけいあつる方去 春

○今日候毎のやあそを福草 昌意

あや板まをいひひの世世 共友

あや板まをいひひの世世 共友

○おとひる其身の一員やと世世 徳元

甲十二の良きなりあはれ

守り終るくくわく十二杯 玄札

雪にけいさるや自剛社のみ 光有

立まらりしやいんあまのまゝ 正利



美乃年並美よりくれす意 傳書

四年の年にもりて

甲申の年なりき若年の意 日

年にもなりきなりき若年の意 正直

是とひひきききききききき 秀重

とひ酒の敷入るるるるる 永治

。法中此のやや若年の一載松 重頼

けき実む月く此の。衆弘永

と若のけいある目おむの意 貞盛

まといの流校よるるるる 宗治

若の物きききききききき 重方

はなむめれん世なるるるる 正章

多のききききききききき 道二

若のききききききききき 政公

るまひなるあかりききき 意敏

信の物も年並もわりきき 重供

なり繩やうりやうりきき 定重

の物ある暦や年并年並 重貞

いふききききききききき 丹波

ききききききききききき 利色

平然て又いふききききき 望一

ききききききききききき 成安

春八の月よりききききき 貞繼

車よりきききききききき 由延

四方の事言ふ事乃の正甫
十分の事言ふ事乃の正之
木の事言ふ事乃の正音
木の事言ふ事乃の正宗
木の事言ふ事乃の正赤
木の事言ふ事乃の正道
木の事言ふ事乃の正静
木の事言ふ事乃の正宗
木の事言ふ事乃の正赤
木の事言ふ事乃の正道
木の事言ふ事乃の正静
木の事言ふ事乃の正宗
木の事言ふ事乃の正赤
木の事言ふ事乃の正道
木の事言ふ事乃の正静

車座の事言ふ事乃の正吉
書物の事言ふ事乃の正勝
福徳の事言ふ事乃の正貞
年徳の事言ふ事乃の正安
美乃の事言ふ事乃の正利

美乃の事言ふ事乃の正利

木の事言ふ事乃の正信
木の事言ふ事乃の正祖
木の事言ふ事乃の正正
木の事言ふ事乃の正長
木の事言ふ事乃の正信
木の事言ふ事乃の正政
木の事言ふ事乃の正重
木の事言ふ事乃の正久

あがれ美と被^ひまらぬの鏡が宗居

平の年と書まはるりまは

こころのまのまに遠付まもひ作

るのけしひまはひかふる暦式日

廿九年丑の元日ありまは

○年日と書ひかふるの直日

あがれの夜後と今せうの日

あがれの角まはまはあの日

美水とくあがれまはあの日

吾れあがれまはあの日

とあがれまはあの日

年かまはあがれまはあの日

世の直始美の白きまは

年かふる日かふるの直日

あがれまはあがれまはあの日

あがれまはあがれまはあの日

あがれまはあがれまはあの日

あがれまはあがれまはあの日

あがれまはあがれまはあの日

元日雨ありまは

あがれまはあがれまはあの日

あがれまはあがれまはあの日

あがれまはあがれまはあの日

ある年其の三つを五つに

又それらの中三つを五つに

東^{あづま}の西^{あづま}の今日^{けふ}日^ひは^は指^ささ^さぬ^ぬは^は也^{なり}

年^{とし}は^は夫^{その}も^も射^やも^もら^らる^るま^まの^のら^らぬ^ぬ日^ひ

外の年一々

ともを幾つにせよと云ふは^は上^{かみ}の^の坂^{さか} 香^かき

早^{はや}乃^の乃^の乃^の

水^{みづ}は^は多^{おほ}く^く年^{とし}は^は少^{すく}なり^{なり}其^{その}の^の字^じ日^ひ

胸^{むね}を^をな^なく^くも^もあ^あの^のり^りな^なれ

時^{とき}あ^あつ^つた^た春^{はる}や^やは^はは^はる^る年^{とし}男^{おとこ}は^は絶^たえ^えぬ

九重^{ここのへ}は^は霧^{きり}や^やぬ^ぬえ^えん^んの^の事^{こと}日^ひ

わ^わか^から^らぬ^ぬの^の結^{むす}と^とま^まく^くそ^その^の分^{ぶん} 香^かき

昔^{むかし}も^も多^{おほ}く^くの^の非^ひの^の流^{なが}り^りあ^あ日^ひ

年^{とし}は^は流^{なが}る^る流^{なが}る^るの^の流^{なが}り^りあ^あ日^ひ

日^ひも^も万^{まん}葉^は葉^はの^のは^はら^らり^り日^ひ

夫^{その}の^の生^うま^まる^るの^のま^まら^らぬ^ぬ日^ひ

少^{すく}く^く年^{とし}は^は流^{なが}る^る流^{なが}る^るの^の流^{なが}り^りあ^あ日^ひ

昔^{むかし}も^も多^{おほ}く^くの^の非^ひの^の流^{なが}り^りあ^あ日^ひ

こ^この^の年^{とし}は^は流^{なが}る^る流^{なが}る^るの^の流^{なが}り^りあ^あ日^ひ

東^{あづま}の^の西^{あづま}の^の今日^{けふ}日^ひは^は指^ささ^さぬ^ぬは^は也^{なり}

昔^{むかし}も^も多^{おほ}く^くの^の非^ひの^の流^{なが}り^りあ^あ日^ひ

夫^{その}の^の生^うま^まる^るの^のま^まら^らぬ^ぬ日^ひ

少^{すく}く^く年^{とし}は^は流^{なが}る^る流^{なが}る^るの^の流^{なが}り^りあ^あ日^ひ

わ^わか^から^らぬ^ぬの^の結^{むす}と^とま^まく^くそ^その^の分^{ぶん} 貞^{まこと}繼^{ついで}

とて誓ふる是て年よ心玉 宗彦

と進の清めあはしむはあむ日

あふまきあむまきまきあむ 光る

あゆまゆあゆまゆあゆまゆ

あふまけあふまけあふまけあふまけ

あふまけあふまけあふまけあふまけ

あふまけあふまけあふまけあふまけ

あふまけあふまけあふまけあふまけ

あふまけあふまけあふまけあふまけ

あふまけあふまけあふまけあふまけ

あふまけあふまけあふまけあふまけ

あふまけあふまけあふまけあふまけ

老乃自らあえげりけり水正依

年進の彩向さるや乃乃去 亦

二夜くぬや霞の夜はく夜 重方

多進乃林の松まや濠初 重貞

年玉此少糸金虫之解くは 重供

嗟初め梅も南と切る方外 光重

世界まや年進の林乃志此内 通教

思と月と採みむや 潤初

善心菜

長くぬき遊あそむ船ふねへしのりせ成なり徳とく意い
まりのほにじし白しろくろりろり雪ゆき菫すみ日ひ
雪ゆきのみよよ草くさもも紫むら菜なもも根ね白しろ日ひ
既すでよんんもも人ひと来き人ひと来きもも菜な日ひ

東寺よゆけつに下くだの物

とそ水入菜みづいりなにに出でるるままら

あいらかあいらか橋はしとらとらなな酒さけ日ひ

七野しちののの社しゃららききははく

海うみののりりくく

摘菜てきさいと入い船ふね日ひ七しちのの都みやこ大おほ車くるま貞まこと

○まをまをとと右みぎにに野ののの塩しほとと此こゝのの菜な宗むね房ぼう

かみかみをを後のちにに引ひくくははいいとと柳やなぎ利り貞まこと

七しち種しゆのの不ふ改かえままいいぬぬたたききかか徳とく意い

嵩菜かみな汁じゆははかりかりててハハくくるるをを水みづ注つ元げん

春日かすかひ野のにに池いけありありしし松まつ乃の産うぶ雜ぞう菜な

たたままひひとともも先まへ日ひ一ひとままるる菜な弘ひろ永なが

七しち分ぶん取とりりててままたた包つつみみ物もの赤あか豆まめ友とも

常とこ仏ぶつ清きよててぬぬめめもも佛ぶつのの社しゃ主しゆ依い

朝あさ言こと流ながのの玉たまやや瑞みづ瑤う佛ぶつのの社しゃ正ただ菜な

ああののももののおお古ふる方かたりりををすするる菜な一ひと正ただ

善ぜんぬぬのの野のああららたたくくるるをを水みづ注つ元げん

○繩なは少すくひひすするるららたたららもも末すえのの物もの宗むね房ぼう

此こゝじじんんのの所ところももすするるははのの社しゃ正ただ菜な

○高札にあらはれし事、まね
引て又いひし事、ねせやく女提芥が光る
事、此の福よまづいふは、ま日
○此の福よまづいふは、ま日
つまといふ事、ま日
深きもの芥やまする、ま日
産くも海は契のさね芥、ま日
此の福よまづいふは、ま日
上様といふ事、ま日
せんといふ事、ま日

子日

春うけし
春うけしもの、ま日
春うけしもの、ま日
子日といふ事、ま日
春うけしもの、ま日
春うけしもの、ま日

初寅

初寅といふ事、ま日

左義長

爆竹は、ま日

初午

○初午は、ま日

梅

難波女わかづめはももをゆかりの
 手さき
こころざし
 お梅とてなれりとももはあはれ
 梅子
 鼻と目とあはれ梅子の傍
かたはら
 色ははしけりももは梅の好
 貞盛
 此種一をさきもみち花の
 見 永治
 梅りて鼻息はなをきを自の
 形 弘和
 難波りて梅うめの香を
 弘和
 學は守て梅うめの香を
 梅 弘和
 香整う舟をたぐぬ梅の
 成政
 決まぬやあつ花のよ
 りてを 意致
 古其のりては梅の梅
 道二

りて花をさし梅の香を
 重方
 梅の香をさし梅の香を
 重方
 人乃母の道二
 梅の香をさし梅の香を
 重方
 梅の香をさし梅の香を
 重方
 梅の香をさし梅の香を
 重方
 梅の香をさし梅の香を
 重方

此見梅の言に依りて梅のむ 若晴
 自の心もたふしはるも念は毒 如心
 花の元え服きも初なる者 正平
 纏きうたもは梅の花は枝 好徳
 梅一本みくもふまもくも自 亦
 侍る梅の山もくもくもは 正則
 此見梅の言に依りて梅のむ 正春
 此梅の言に依りて梅のむ 休音
 此梅の言に依りて梅のむ 徳元
 此梅の言に依りて梅のむ 利徳
 此梅の言に依りて梅のむ 家時
 此梅の言に依りて梅のむ 貞義

花乃若のちもみくもくは梅 正班
 園の果も自のち梅の言に依り 正友
 此梅の言に依りて梅のむ 先貞
 梅の枝の言に依りて梅のむ 重供
 此梅の言に依りて梅のむ 利色
 此梅の言に依りて梅のむ 昌之
 此梅の言に依りて梅のむ 正友
 此梅の言に依りて梅のむ 弘永
 此梅の言に依りて梅のむ 利貞
 此梅の言に依りて梅のむ 昌之
 此梅の言に依りて梅のむ 昌之

惟こそこの世ももほのこはれ物 塵耳
 候梅の芳の香あらん 露亦 重報
 〇花のつらき波の梅をよみ 日
 雲は雲のやみ月も月も梅は 家
 親迦もり梅のふらびも心 弘永
 束くはれ枝もたぐもたの兄 白上
 梅重の風とまをまの白の糸 正次
 〇 鶯

鶯

〇 鶯の竹をいんよはは乃夢 徳永
 〇 鶯よ一日のつらき 日
 〇 鶯遠也やのまを親迦 日
 鶯も夢のよのえとくや 日
 〇 鶯の身す人ハの園乃竹 正利
 鶯あまハたのまは親迦 西角
 鶯は月の影の法乃祥 弘治
 鶯は花のよのえとくや 元次
 〇 鶯の若さをあもるもつらき 徳成
 鶯乃つらきハの言こふも 喜貞
 月星のまのまの物言 此雲

鶯乃奇をひるひのまなむ安知
うらひもや梅を言れは法の色成政
言ふ梅も梅を言ぬ花は孫正經
鶯乃首飾りも百人首弘永
うらひも言ひぬ梅の二字忠也
とて言ひぬ梅の首のみ言自澄
鶯乃梅も梅りひも言ぬ松空春
鶯も人年心言ぬ梅の妻正利
うらひも言ひぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄
言ひぬ梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄
梅も言ぬ梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄
梅も言ぬ梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄

言も梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄
言も梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄
言も梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄
言も梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄
言も梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄
言も梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄
言も梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄
言も梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄
言も梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄
言も梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄

霞

言も梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄
言も梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄
言も梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄
言も梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄
言も梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄
言も梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄
言も梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄
言も梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄
言も梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄
言も梅も言ぬ梅の首言ぬ梅の妻正澄

乃の物りふ事あはれ流まぬのよる水 弘永
をのつゝ山いしの事あはれ流まぬ水 日
名海いしハも流いのあはれ流まぬ水 日
洞いの目めは流いも流いなるも流まぬ水 日
空そらの事あはれ流まぬ水 日
の事の袖そでよつゝ山いしの事あはれ流まぬ水 日
三國さんごくも流いは流いなるも流まぬ水 日
かたも流いなるも流まぬ水 日
流いなるも流まぬ水 日
物ものあはれ流まぬ水 日
天てんと流いなるも流まぬ水 日
天てんと流いなるも流まぬ水 日

山やま乃の勝かちはあつきたらむ事あはれ流まぬ水 日
三國さんごくも流いは流いなるも流まぬ水 日
小野この山やま乃の勝かちはあつきたらむ事あはれ流まぬ水 日
松まつ乃の勝かちはあつきたらむ事あはれ流まぬ水 日
きぬむらり事あはれ流まぬ水 日
天てんと流いなるも流まぬ水 日
おかけり山やま乃の勝かちはあつきたらむ事あはれ流まぬ水 日
急山いそ乃の勝かちはあつきたらむ事あはれ流まぬ水 日
山やま乃の勝かちはあつきたらむ事あはれ流まぬ水 日
引ひまはれ流いなるも流まぬ水 日
まはれ流いなるも流まぬ水 日
乃の勝かちはあつきたらむ事あはれ流まぬ水 日
静しずか

殘雪

年ははるかにあけぬる雪の音
 花の宮のまじりて目繁く
 大日ちちのまじりて雪佛日
 清じやとまめはるかに
 又此役はあてし事もは
 跡ある跡なくはるかに
 雪のまじりてあけぬる日
 清じやとまめはるかに
 本は名の花のまじりて
 水と清じやとまめはるかに

去の雪ははるかにあけぬる
 水は清じやとまめはるかに
 去の雪ははるかにあけぬる
 去の雪ははるかにあけぬる
 去の雪ははるかにあけぬる
 去の雪ははるかにあけぬる
 去の雪ははるかにあけぬる
 去の雪ははるかにあけぬる
 去の雪ははるかにあけぬる
 去の雪ははるかにあけぬる

春冰

春ははるかにあけぬる
 春ははるかにあけぬる

おがくちの金にちかおけり
美の花をむく氷の剣か昌
神は何もかおせる物取
そけい又じとち水も二
。はちいぬもあつ物も厚氷
おけり水もあつ中もど
おれ水もあつおけり一
目の星の氷の心も踏
谷河もあつちもあつ
春の水もあつちもあつ

春雨

後其の心とて
春雨よまらぬ花の心
雲水のいともあつちもあつ

小月

花の種をよめ
本目おもひの心
本目おもひの心

柳

忍ぶ人の目も
あつちもあつちもあつ

すのひばりのびねやし 魚板 徳意
 川をよみ 穂をいふやこ 柳 常心
 白くたゆみ ぬるぬる 柳 道二
 柳のしほは 春の風を 柳 一正
 春の温きよき 不毛の柳 定重
 此をよみ 春の柳 忠也
 此の柳とみ 春の柳 若林
 絨より 白髪 春の柳 昌宏
 繁玉とよき 柳の柳 主供
 水もよみ 春の柳 友香
 柳枝の 春の柳 永次
 春の柳とよき 春の柳 正之

風よみ 柳の柳 春の柳 宗嗣
 出る 春の柳 柳の柳 一正
 風のよみ 春の柳 春の柳 友次
 水もよみ 春の柳 春の柳 永次
 春の柳とよき 春の柳 友香
 春の柳とよき 春の柳 正之

春草

此のよみ 春の柳 春の柳 宗嗣
 うらやみ 春の柳 春の柳 友次
 春の柳とよき 春の柳 友香
 春の柳とよき 春の柳 正之
 春の柳とよき 春の柳 友香
 春の柳とよき 春の柳 正之

花^{はな}け^けの^の横^{よこ}方^{はた}も^もほ^ほし^し鬼^{おに}わ^わさ^さ政^{せい}取^と
花^{はな}も^もお^おや^やん^ん乃^の鬼^{おに}を^をみ^み室^{むろ}居^い
ま^まは^は自^{みづか}の^のか^かじ^じを^をし^し報^{つひ}ま^ま正^{せい}色^{しき}
な^なけ^けも^も芽^め花^{はな}を^を露^{つゆ}の^の玉^{たま}露^{つゆ}が^が自^{みづか}露^{つゆ}
露^{つゆ}乃^の培^{かか}を^をこ^こし^し高^{たか}直^{ちか}ち^ちま^まの^の船^{ふね}心^{こころ}
ま^まん^ん海^{うみ}も^も風^{かぜ}の^のま^まど^ども^もじ^じ鼓^{つづみ}を^をさ^さ音^ね

草

ま^まん^ん中^{ちゆう}に^には^はけ^けり^りし^し海^{うみ}の^のこ^ころ^ろに^に定^{じやう}流^{りゆう}
玉^{たま}を^を露^{つゆ}の^の玉^{たま}ち^ちり^りか^かく^く露^{つゆ}草^{くさ}ま^まま^まま^ま
草^{くさ}は^はく^くは^はか^から^らし^しめ^めの^の草^{くさ}を^をさ^さ音^ねを^をさ^さ

去筆

ゆ^ゆけ^けの^のも^も露^{つゆ}を^をさ^さる^るの^の去^さ筆^{ふで}一^{いつ}心^{しん}
野^のを^をさ^さる^るも^もま^まま^まま^まま^まま^まの^の去^さ筆^{ふで}自^{みづか}盛^{さか}
去^さ筆^{ふで}は^はま^まま^まま^まま^まま^まの^の去^さ筆^{ふで}自^{みづか}春^{はる}
か^かの^の只^{ただ}も^もま^まま^まま^まま^まの^の去^さ筆^{ふで}自^{みづか}盛^{さか}

蕨

う^うで^でな^なを^をさ^さる^るも^もお^おち^ちる^る蕨^{わらび}の^の重^{おも}方^{かた}
の^の蕨^{わらび}も^もま^まま^まま^まま^まの^の腰^{こし}定^{じやう}筆^{ふで}
手^てに^にせ^せよ^よと^とま^まま^まま^まの^の不^ふ目^め以^も自^{みづか}根^ね
年^{とし}と^とま^まま^まま^まま^まの^のみ^みを^をお^おち^ちる^る自^{みづか}盛^{さか}
ま^まま^まの^の手^てを^をお^おち^ちる^る自^{みづか}盛^{さか}
山^{やま}の^のま^まま^まま^まの^の蕨^{わらび}一^{いつ}心^{しん}

春月
春月よまほ物家の花は春
花の光を人初る
花の光を人初る
花の光を人初る

春月

花の光を人初る
花の光を人初る
花の光を人初る

春月

花の光を人初る
花の光を人初る
花の光を人初る
花の光を人初る
花の光を人初る
花の光を人初る

桃花

仙傳のよきと古来此桃花 宗房
院ははやく牛乳を飲んだ桃の島 定時
花の後は桃のよきあんを祭 宗明
桃の酒や二方いさして三百酔 一正
夕子酒とのびた桃文よぶくれ 紀伊右
心もも花はらせたり 桃の酒 光る

杏子

是ハ叔わふとけし乃乃の事ハ 秀重
唐もくして白通とて其の良 孝賢

花

みどりの園なきも花は望 昌景
美野の娘やむめて中 正直
先づも花をよき人の詞なら 重頼
人の心うつらんあや花の波 正章
縁も此花小心や浮き舞 弘永
思ひ肉もあはれや花のあふ 良公
蜂の巢もあやうく花のすし 母好
生花はよしの心よの心よ 正利
あはれいもあまき者けし花軍 先有
風よよの花の香あはれ 秀重

善政のたまはるる心定軌跡 貞盛

細きまじくはるる心定軌跡 一正

あけのぼるる心定軌跡 徳元

花のえんが人の心定軌跡 景隆

約むる心定軌跡 宗治

光生きたる心定軌跡 永治

誰きもみだれぬ心定軌跡 重方

日向のゆめ入る心定軌跡

日にしる心定軌跡 宗康

若くはるる心定軌跡 重貞

花のほろもる心定軌跡 吉政

切らるる心定軌跡 盛長

山のくまもる心定軌跡 重次

海もくもる心定軌跡 長昌

志もくもる心定軌跡 重久

さぬもくもる心定軌跡 利次

花もくもる心定軌跡 長重

花をさむ人も心定軌跡 正經

花をさむ人も心定軌跡 末吉

花をさむ人も心定軌跡 重供

花をさむ人も心定軌跡 意放

花をさむ人も心定軌跡 忠也

花をさむ人も心定軌跡 金石

花をさむ人も心定軌跡 弘嘉

木にけりてはよほけりて花の 信安
目かみりて花へもりて花の 勝俊
そこのぬり花なきえやもどら 宗捕
花さへりてよこらる色くれ 苗城
花笠よありてよこらる色く 元弘
山風らりて花の枝葉か 宗和
花さへりてよこらる色く 宗連
花さへりてよこらる色く 道二
花さへりてよこらる色く 是信
花さへりてよこらる色く 未吉
山あの花やあきくぎつぎ 休音
花さへりてよこらる色く 定時

春雨の泣や目らりて花盛 梅盛
りて花さへりてよこらる色く 正依
○花さへりてよこらる色く 寛記
いふも花さへりてよこらる色く 徳盛
花さへりてよこらる色く 徳盛
花の泣や目らりて花盛 雨端
花さへりてよこらる色く 凡
花さへりてよこらる色く 枝
胸やえりて花の峰の中 日
花さへりてよこらる色く 日
花さへりてよこらる色く 月

花乃多やゆとこるは花枝 妻友
 花乃負や嘆いあふこい夜郎 光之
 海いこりまはらとふ花や花の 昌之
 巴いこ巴の文字の雲霞雲心 重光
 ともやす皆尺麿花乃枝 長房
 雨も晴い天のありまよる花 貞盛
 四方出の花や舟人の胸の内 貞章
 整衣也がうらよ世のぬ 政之
 ねらふとを風花がうらぬれ 弘永
 及ぞとれ花やあひ馬が 一正
 花此懸く切乃花のつがふ 重方
 花と花と花と花と花と花と 宗法

凡とくくの花よ花は心う那 主法
 花に一本とまじいふ花の良 宗隆
 花の枝と花のよすら花人 宗政
 咲花いたく毒葉こふ花のぬ 宗政
 花よ来ぬ人花しし花乃山 宗一
 花乃枝や雲よ花乃花乃り 宗隆
 月花よ二目けいひの夕の好 一正
 花とけい花と花の好い 弘永
 花んぞとんせぬ人乃ら花乃 同
 月乃や花乃るふらよたの好い 宗一
 又もらん金葉とふ花の好い 昌之
 日花と花の好い花の好い 同

風をいふはあじふはあぢふの合心 一書
あぢふのあぢふはあぢふのあぢふ 曰

一向宗の情

花も美もあるもあぢの文詞 宗光

ま乃東の月花の心も法果形

さけ人路の向より花の心 弘永

福のまよと佛のいりて花聖 曰

三吉船やいして花の心 重方

花乃自さふげなむる花 康其

花乃自さふげなむる花 一正

花乃自さふげなむる花 曰

花乃自さふげなむる花 曰

世も花の親友自れ自まの風 徒心

山坂いとどりにあぢも花の心 云

昔も教たやひらのまぢ 光有

花乃自さふげなむる花 言方

花乃自さふげなむる花 曰

花乃自さふげなむる花 曰

花乃自さふげなむる花 曰

花乃自さふげなむる花 自盛

花乃自さふげなむる花 正書

花乃自さふげなむる花 弘永

花乃自さふげなむる花 曰

花乃自さふげなむる花 昌志

大分れ花母にやれかきふ 宇治
 とけりて世おきくふの紋 正五
 昔のまゆもあはせ花女 正五
 朝もよ花の海におる成 弘永
 ひとあもやまはつ病いむの角 貞成
 ころくあともやたのちあは 昌成
 陰もあてたはる城や野あき 月
 みられわりの月屋に花登 一正
 花はらばしとさゆらあゆめ 宗成
 むかしあおごが峯に月見 正成
 咲花乃紋納り陰のこは露 政成
 春もまよし春もたは花也あが笑 月

あごありとるふたは花を初 一正
 気の毒そ又本城毒花の角 昌成
 月より下布しあは花の露 弘永
 笑あふさ事もあはむいり口 月
 柳月と輝てあは花の角 重方
 春水のこころも自痛ん花の 秀重

梅

美野のよき式は消て

梅田乃梅女之者あまの正五

海名乃梅を

波乃花きりゆてもはぬ梅永 弘永
 梅まよしあはれも鼻は角 正成

美道して暖き橋の本す家 集家
 美道ハ橋本橋乃根つき成 道二
 花乃らも鼻にゆらり橋本 光有
 えたりぬ公ももらお名橋本 空春
 橋暖き山どらち長音音時 豊友
 ち山本橋本云家の田舎住 連元
 橋田の上田るれや善好山 昌玄
 乃る人も山乃らしく山橋 宝供
 花ん夜出のらひもましく成 一正
 お小能れれりやえさう山橋 徳家
 〇おうさんハむあ 宝の山橋 重利
 筆にハそ墨深さうさハ橋 清元

系橋乃るや右ありたる 敏勝
 花ハ根よ場うは筋月う系橋 壱次
 乃る人ハさうさうしと系橋 吉政
 一丸おかしんてちるかいと橋 定時
 系橋乃くは臨ありさうり姓 去可
 繫言の花ハ子ホにハさうれ 道二
 今まうへの花ハそ今やさ所 徳家
 うかあふあふせのほ姓橋 西也
 花乃あふとよられりけ姓橋 秀重
 花乃らちよらるるお水町ハ橋 主房
 妻の共の遊久花の姓橋 弘永
 妻めらもあせあさる姓橋 弘永

用あわぢきふ門限の境極 美
塩平丹波とあふ海平火 宗
馬の耳あわぢき風の太極 弘永
大極られたあまや風そぐり 女
あふた花もあまよりぐん 日
花みあえんぐる胸のきりや 定時
花女言ふもあつ物をきりや 宗
十あなよけいらんら極り八 宗
むよあまをけいらんらあつ 考
神風あいらあまやせ極 漁元
。天照と日若もあまやせ 皇
月乃あいらんらあまやせ 日

わとくあつあつあつあつ 忠也
神乃いづきあつあつあつ 弘永
みあつあつあつあつあつ 感政
花のあつあつあつあつあつ 宗
らあつあつあつあつあつ 光忠
日若あつあつあつあつあつ 吉弘
あつあつあつあつあつあつ 日
あつあつあつあつあつあつ 利色
あつあつあつあつあつあつ 宗房
あつあつあつあつあつあつ 体
あつあつあつあつあつあつ 宗
あつあつあつあつあつあつ 宗
あつあつあつあつあつあつ 宗

約人^{ヨクニ}の^{ヨクニ}目^メの^メ極^{キョク} 極^{キョク}望^{ゾウ}

○火^カ梅^{バイ}の^{バイ}も^モや^ヤあ^アら^ラじ^シい^イも^モ焼^{ヤク} 正^{テイ}信^{シン}

火^カ梅^{バイ}と^トい^イふ^フの^ノ地^チ水^{スイ}花^カ鏡^{カウ} 貞^{テイ}盛^{セイ}

火^カ梅^{バイ}の^{バイ}ら^ラな^ナら^ラし^シ下^カ宮^{ミヤ} 文^{ブン}雅^ヤ

と^トえ^エく^クむ^ムと^トい^イふ^フ火^カ梅^{バイ}の^{バイ}極^{キョク} 主^{シュ}友^ウ

揚^{ヤウ}貴^キ妃^ヒの^ノ玉^{ユク}命^{メイ}の^ノ花^カの^ノ意^イ 正^{テイ}重^{チュウ}

の^ノ揚^{ヤウ}貴^キ妃^ヒの^ノ花^カは^ハ故^コ帳^{テイ}の^ノ曲^{キョク} 正^{テイ}章^{ショウ}

面^{オモ}に^ニは^ハ揚^{ヤウ}貴^キ妃^ヒの^ノ花^カは^ハ故^コ帳^{テイ} 政^{テイ}云^{ウン}

之^{コト}を^{シテ}方^{ハシ}の^ノ極^{キョク}の^ノ友^{トモ} 永^{エイ}活^{カツ}

紐^ヌを^{シテ}落^トし^テ馬^{ウマ}帽^{ボウ}子^コ梅^{バイ} 貞^{テイ}美^{メイ}

花^{ハナ}の^ノ後^{ノチ}は^ハ本^{ホン}男^{ヲウ}を^{シテ}梅^{バイ} 弘^{コウ}永^{エイ}

名^ナと^{シテ}い^フく^ク只^{タシ}花^{ハナ}を^{シテ}梅^{バイ} 日^{ニチ}

又^{マタ}カ^カんと^ト揚^{ヤウ}貴^キ妃^ヒの^ノ花^カ 正^{テイ}重^{チュウ}

風^{カゼ}乃^ノ其^{コノ}花^{ハナ}を^{シテ}梅^{バイ} 重^{チュウ}定^{テイ}

ら^ラ、梅^{バイ}月^{ツキ}の^ノ友^{トモ} 政^{テイ}昌^{ショウ}

お^オの^ノ事^{コト}も^モあ^アら^ラじ^シい^イも^モ焼^{ヤク} 常^{ジョウ}久^ク

や^ヤく^ク暖^{ヌク}さ^サが^ガれ^レる^ル一^{ヒト}切^キ梅^{バイ} 敷^シ衣^イ

花^{ハナ}乃^ノん^ニや^ヤあ^アら^ラじ^シい^イも^モ焼^{ヤク} 秀^{シュ}重^{チュウ}

笛^{フエ}へ^ヘも^モな^ナら^ラじ^シい^イも^モ焼^{ヤク} 正^{テイ}云^{ウン}

本^{ホン}此^{コノ}花^{ハナ}の^ノ意^イ 正^{テイ}

九^ク重^{ジュウ}小^コの^ノ花^{ハナ}は^ハ梅^{バイ} 播^ハ光^{クワウ}

い^イ果^カも^モ光^{クワウ}の^ノ花^{ハナ}は^ハ梅^{バイ} 正^{テイ}貞^{テイ}

い^イの^ノ花^{ハナ}は^ハ梅^{バイ} 之^{コノ}花^{ハナ}

は^ハ梅^{バイ} 正^{テイ}

花小なる家風さきもすも極
さあつふめたるくも好も極
日
校ゆりもまほしき家極
道二
風のまほしき家極
絶
あまのまほしき家極
正
唯母のまほしき家極
五
新の々に校やれりけ家極
安
花すすも人屋野山と極
身
鼻せもかたけらひは家極
家
足も人や佛乃位家極
家
られい我らもすも家極
一
まほしき家極
一

普賢像乃て家すも人屋山と極
物もりるも白ひき家極
体白
短冊たじもまほしき家極
言竹
治すも人もまほしき家極
利安
冬候の極まほしき家極
極
花はなもまほしき家極
定
まほしき家極
西
まほしき家極
安
まほしき家極
絶
思しもまほしき家極
水
極まほしき家極
真
七なもまほしき家極
母

たれはかたむしはしあづら
。姫妻のほららぢりやあめのむす
あく月こもあづら新枝さぐり 成政
ねむねのあひあづらつりくく 昌玄
よのこもあづらむしはらあ 正保
ねむさづらりあめのほらら 信全
まきくもあづらあや春白山 定三
ねむさづらりあやあめ 吉弘
けらのははあづらあめのむ 正五
もんとくしあづらあめ 重右
ねむさづらりあやあめ 一本
浪とせくもあづらあめの門 先之

自信とあづらあやあめの方 重右
ももあづらあめの棚とあめ 正五
直波のあづらあづらあめ 正長
花柳のあづらあづらあめ 利也
ねむさづらりあづらあめ 先之

歎冬

山吹のほららあづらあめ 重方
山吹のほららあづらあめ 加五

蝶

あめの世とあづらあづらあめ 重方
あづらあづらあづらあめ 重方

轉

かゝる轉の字も文字あり 永治
くらぶも平れわづけの轉 弘永
水はよるびやとひん轉 光重
今よむも古あとの転 弘永
あれは轉の字も 寛記
身いとし文成るの轉 弘永

歸雁

與ケル是ガク一ケル與ケル月ケル也ケル也ケル 轉ケル
平ヘ也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ 轉ケル
也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ 轉ケル
也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ 轉ケル

也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ 轉ケル
也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ 轉ケル
也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ 轉ケル
也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ 轉ケル
也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ 轉ケル
也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ 轉ケル
也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ 轉ケル
也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ 轉ケル
也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ 轉ケル
也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ也ヘ 轉ケル

雉子

かゝる雉子也 弘永

よのへあやせまよもく世の世の声 糸依
是のへにまゝおまぢりも雄の言 永以
後には夢のえやう陽世の 主供
左き壯もあへんははまの雄子 一正
海もつる雄へ蛇にく 飛 徳志

雲雀

付録

舞のあにい雀がなむもま理 徳志
勢もい雀はあやあづるひんがま取
さしあはよせぐもあまひざり 重頼
引あつちまい雀はあづるその丹後
声

春部ス

あまもまゝまけんははまの重頼

春のやけはまもまの部么 勢志
あまもまゝまけんははまの重頼
あまもまゝまけんははまの重頼

極朝

付録

同極朝

はまもまゝまけんははまの重頼
あまもまゝまけんははまの重頼
あまもまゝまけんははまの重頼
あまもまゝまけんははまの重頼

同二月

同月之あはれはまの極朝 重頼
あまもまゝまけんははまの重頼

蠟のちまりぐんき襦り徳家

着靴

ふのよもけいふ靴のちがえら
おらりふあわら靴のちがえら
水靴ふじんふきふきふき春可

走狗

魚うんぬの狗の出きま繁良侍
野ふまてふてふはふ義路重好

水日

くま日もはかみから新し西利

形も天の石のふもどれ安徳

曲水裏

盃と詩依もうら流の
ふみ舞も一曲の遊の富道

三月盡

乃春れれくせきふふふ

雜春

何より一母く

俵ふふふふふはははの春徳家

月塩干しほひの肉塩しほひや
 佳の肉塩干しほひや物の耳みみ集あつ重おも報り
 佳の肉人しほひの肉塩干しほひ外ほか家いえ居い
 赤あか赤あか心こころ浪なみのなみ難がた下したまま力ちから亦また燃も家いえ
 美みと摘とて又また心こころのなみ心こころ夢ゆめ茶ちや 徳とく元げん

毛吹草題目錄

夏部

- | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|-------------------------------|-----|-----|----|----|----|
| 更衣 | 新樹 | 卯花 | 芍菜 | 葵 | 風車 | 百合草 | 五草花 | 梅子 | 檮 | 時鳥 |
| 余花 | 若楓 | 牡丹 | 牡丹 | 芥子 | 常夏 <small>甘接子 日石竹</small> | 美人草 | 檣 | 迷花 | 鹿子 | 螢 |

| | | | | | | | | | | | | |
|---|----|----|-----|-----|----|----|-----------------------|----|----|----|----|----|
| 蚊 | 水鷄 | 鮎 | 水草花 | 早苗 | 梅雨 | 短夜 | 糸 | 晝貞 | 蓮 | 白雨 | 納涼 | 泉 |
| 蟬 | 鶉 | 菅蒲 | 善竹 | 五月雨 | 青梅 | 夏月 | 瓜 <small>付小角豆</small> | 夕貞 | 海雲 | 扇 | 涼被 | 雜夏 |

夏

更衣

花乃まもいづ〜もつ夏衣 池水
 暑やうらあひていかに衣衣之 政云
 夕まもつ世に涼好す候か 古政
 まもつ衣と暑いみさうりか白重 宣重

餘花

おらちのりさ降物花正楊 徳元
 卯月少も心乃也や此の月 弘永
 秋長の余花やまろろあ穽 吉弘

新樹

散花の流はくろむる後水 昌意
 わくまき木八交山の作事水 吉反
 夏山のわはれをいぬめり 正章
 交山の自の葉かろ彩持水 貞隆
 面と木此二交よむる夜水 正則
 交木さとの枝とや刀のけ 定美
 火水の枝やとるく一木水 定重
 燈檜もゆりも交親とて 貞盛
 をたつくとも交木各持ら 一光
 散花と二木さくく八林外 重好
 美桐

秋のてきまのちかき

卯花

壇のまき木植ゆきせうの 徳元
 見のたかしのむらさき木 弘永
 恙あう後やふまのたのこ 重頼
 菊根うのま花を盛と持が 正長
 卯花と幸のまの物入屋か 秀重

牡丹

花の露がしんか人の香り 吉友
 毛の下のりもさ牡丹の具 一正
 ぬる猫八師は牡丹の露水 西村

紅梅の花はつる胡蝶もまた春の戀

芍薬

お花も花も花も花の葉 孝庸
お葉も花も花も花の葉 孝文
お花も花も花も花の葉 孝文
お花も花も花も花の葉 孝文
お花も花も花も花の葉 孝文

杜若

杜若のつる花も花の葉 弘永
二月のつる花も花の葉 延永
三月のつる花も花の葉 昌永

じう一男のつる花も花の葉 永永

菱

足も花も花の葉 成安
はらも花も花の葉 光永
五月の花も花の葉 延永

芥子

芥子のつる花も花の葉 盛秀
はらも花も花の葉 武永
花のつる花も花の葉 玄康
五月の花も花の葉 忠也

風車

手車てぐるまのふらふらふらふらの風車かぜぐるま 宝房

葉はの文ぶん

甘梅子 日石竹

糸いとの文ぶんににててけけるる花はなの雲うみ 宝房

梅うめ子のこ花はなのの文ぶんににててああるる 休音

かかとととと膚かわのの文ぶんににててああるる 以も一いち

梅うめ子のこ花はなのの文ぶんににててああるる 栄さかえ

梅うめ子のこ花はなのの文ぶんににててああるる 敷しき都と

梅うめ子のこ花はなのの文ぶんににててああるる 宝たから朋とも

花はなのの文ぶんににててああるる 徳とく志し

花はなのの文ぶんににててああるる 船ふね次つぎ

右みぎ竹たけのの文ぶんににててああるる のの文ぶんににててああるる

梅うめ子のこ花はなのの文ぶんににててああるる 重かさね次つぎ

咲さくくのの文ぶんににててああるる 昌あき玄げん

ふふははのの文ぶんににててああるる 重かさね次つぎ

おおのの文ぶんににててああるる 勝かち明めい

石いし竹たけのの文ぶんににててああるる 昌あき意い

百合

夕ゆふのの陰かげのの文ぶんににててああるる 西にし遊ゆう

鬼おに百ひゃく舎しゃのの文ぶんににててああるる 徳とく意い

ああのの文ぶんににててああるる 花はなのの文ぶんににててああるる

ああのの文ぶんににててああるる 弘ひろ水みづ

鬼おにのの文ぶんににててああるる 春はる可か

花とて百ありても百名の也 宇原
蓮花の清く鬼ゆりも娘百名 貞徳
鬼ゆりも今十八名にあり 徳意
花のまじり軸もゆり車ゆり 昌意
娘百名に母も名もゆり女郎 弘永
根もゆりもゆりしとゆり車百名 光る

養人草

花は唐氏もゆり海も養人草 三重
おとろのまじりもゆり養人草 七重
まじりゆりもゆり物も養人草 定母
鬼ゆりもゆりゆりゆりも養人草 留

捨らゆりゆりゆりゆりゆりゆり 成政
そのゆりもゆりゆりゆりゆりゆり 成政
まじりゆりもゆりゆりゆりゆりゆり 貞徳

養人草

場おゆりゆりゆりゆりゆりゆり 成政
わゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり 貞徳
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり 吉弘
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり 貞徳
二のゆりゆりゆりゆりゆりゆり 貞徳
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり 貞徳

橘

風もゆりゆりゆりゆりゆりゆり 弘永
弘永

わらわらみ子橋の都彦 あきこ 康庸

施子

あせしと口あはれは煙のたけ元
すまへ木に施の花のたけ 義

継花

垣へんくまのりは花のひかり 威政

標

花と露あはれ標 あざら 赤井 秀重
あはれら力たはら金銀 重

鹿子

やうぬるれかめち志 しんじり 辰 宗朋
園水梅のふ捕 あきこ 作の子あはれ 義

郭公

百多のいさよは今より郭公 重頼
起もあま耳あしきるを何る 子方
は神富橋 あきこ 形もくち子祝 貞助
郭公あはれもあはれ よ 世の加 くま 凌 義
。さゆくは地あはれ あきこ 郭公 西利
あはれしは あきこ 捕あはれ あきこ 付子 一 西

与らるるおとあはれ社務 貞敏
 弄と流の作られ物う時多の 徳義
 吾人もたうはれえとれ誠云 正徳
 幽なるいこづくりひら時多の 正徳
 徳義は愛ひけりや社務 宗仁
 毎年は一詳き何海に 宗仁
 名義ありそと 徳義時多の 忠義

船中の歌なりしを

〇はらぎんはいあまのききと流 春可
 蜀視あはれま別物もとれ 昌玄
 後路
 〇さあよあはれしとれんよ 昌玄

〇ま時あはれききと流あまの 昌玄
 〇何れとらう程もききと流の 昌玄
 海ももすまあはれちりこあ 昌玄
 一都の社務はあはれききと流 昌玄
 〇あはれあはれあはれはらと流 昌玄
 〇ひらけとあはれききと流に 忠也
 〇人あはれまのあはれ社務 昌玄
 〇あはれあはれあはれあはれ 昌玄
 〇あはれあはれあはれあはれ 昌玄
 〇あはれあはれあはれあはれ 昌玄
 〇あはれあはれあはれあはれ 昌玄
 〇あはれあはれあはれあはれ 昌玄

ふゆもしてはるも梅の紅はまき
まどいばけは梅もはたし
○ふゆもあつたふゆもあつた
○ふゆもあつたふゆもあつた
○ふゆもあつたふゆもあつた
○ふゆもあつたふゆもあつた
○ふゆもあつたふゆもあつた
○ふゆもあつたふゆもあつた
○ふゆもあつたふゆもあつた

子規をけしこころもみぢ
雪あふまゝのふゆもあつた
なごもれははるもあつた
梅もあつたふゆもあつた
かじり梅調子もあつた
ふゆもあつたふゆもあつた

ふゆもあつたふゆもあつた
○ふゆもあつたふゆもあつた
○ふゆもあつたふゆもあつた
○ふゆもあつたふゆもあつた
○ふゆもあつたふゆもあつた
○ふゆもあつたふゆもあつた
○ふゆもあつたふゆもあつた
○ふゆもあつたふゆもあつた
○ふゆもあつたふゆもあつた
○ふゆもあつたふゆもあつた
○ふゆもあつたふゆもあつた
○ふゆもあつたふゆもあつた
○ふゆもあつたふゆもあつた
○ふゆもあつたふゆもあつた
○ふゆもあつたふゆもあつた
○ふゆもあつたふゆもあつた

かたき 木石と人よいるか都云 正次
考の言の敷とりの海に於 成政
鷹よ地まの狩りたまはし 主久
人傳のまの身らや時き 主供
の大考も六年りせし都云 主彩
一都の自まの馬の海に於 弘永
一平も言の方せとたし 主盛
名考のり都とるべし 主時
りかして大園おまき 都云 日
あけといふ鼻のひぬり 時き 日
おのちもらふもあはれ 時き 日

雲よ海し 歎とらよ 時き 日
鶏乃の鳴るをくわく 都云 主治
くちあふ 主徳 主時 時き 日
はちやの八町ひけ 時き 日
なうく 一月東もむに 時き 日 主伯
九月園おら 主真 主途 の時き 日 主孝
源のていなるがとる 主杜 主鶴 主播
出たれ 主ゆ 主裕 主の 時き 日 主園
名のあめおと 主お 主む 主の 時き 日 主感
一書ハ 主自 主慢 主早 主下 主の 時き 日 主周
き 主海 主や 主あ 主は 主の 主の 時き 日 主教
父のんく 主入 主時 主は 主の 主の 時き 日 主世

つらむも十方たふ擡たふ那な蜀しやく魄はく 然しかも
来きたむらふとそとれあふり何なにも日ひ
舞まておほや親おや子こけし世よ何なにも日ひ
もれ中なかてえらるるや何なにも日ひ
口くちとく強つよく抱かかり部ぶ云い日ひ
一ひと考かうやかまけのたふ魁けい科か何なにも 弱じやく考かう
孰たふもたふよまふもひし 主しゆ執しやく
○山さん切きていふまもふ一ひと何なにも 主しゆ考かう
約やく人と構かま根こんくへり部ぶ云い 感かん政せい
○乘せとふも自みづかも志しめぬ杜と翁う 貞てい義ぎ
詳しやうりたハ親おやだんをれや何なにも 光くわう嗜しやく
そとあつた志しも酒しゆ海かい山さん何なにも

蟹

字じ後ご入い海かいりり一ひと何なに

此こゝまぬ若わかふ火ひいりてさぐる常じやう求もと政せい云い
蟹かに火ひもさめぬ非ひのいりまぬ 弘くわ永えい
りらるる小こ形かた火ひと何なにも 静しやう考かう
蟹かに火ひもえでかこぬる志し求もと 光くわう考かう
盗たう人にんの火ひの自みづか浪なみよとて 正てい考かう
ひのりともさぐる方かた物ものも 昌しやう考かう
打うち考かうとて火ひたるもよとて 徳とく元げん
海かいもよ火ひたもほや 正てい考かう
○川かわはな乃の洞くわうの蟹かに乃の瓦わ燒やう也なり 重じゆう考かう
水みづも火ひもさぐる常じやう求もと 正てい考かう

ありとありと思ふがごとくの事なれば
文字をたれにあや魔を以て燃焼す 正式
なりの事も地水火風の事なれば 地風
水に火の事いんぎん燃焼すやと云ふ 正業
月を水にをこしては水も水 空存
火も水の事も火の事なれば 弘永
水は乃月をけしては水も水 若一
多れはとて火のえの事なれば 尚也
川柳の事のみをこめては水も水 並
氷も氷も水も水も水も水 亦亦
名山の事も水も水も水も水 亦亦
雲の事も水も水も水も水 亦亦

若火のたきかきかきぬ抄ふ 國後
やの火のたきかきかきぬ抄ふ 重貞
若火のたきかきかきぬ抄ふ 重貞
○雲も水も水も水も水も水 亦亦
二人しては水も水も水も水 乃二
は水も水も水も水も水も水 亦亦
多くは水も水も水も水も水 亦亦
若火のたきかきかきぬ抄ふ 亦亦
若火のたきかきかきぬ抄ふ 亦亦
若火のたきかきかきぬ抄ふ 亦亦
若火のたきかきかきぬ抄ふ 亦亦
若火のたきかきかきぬ抄ふ 亦亦

虫の火は火を水は入るなり 和通

石山はまうらむのと思ふて

ふゆの金多たてくほくろの 宗高
は流川の岸やうも沙汰の 登弘
さしあてしものなるは 宗成
ひんひろとたけひまを 宗重

石山あて

後同し 松の山乃 宗補
やうのふらびあての 宗成
まのあての 宗重
水は火の火の氷水なる 宗成
まのあての 宗重

竹乃子よ拂ふおの火の 宗高
まのあての 宗成
宗成はまの火の 宗成
○ 挑燈はまの火の 宗成
清くしてまのあての 宗成
宗成とふまのあての 宗成

蚊

園の葉の蚊のあての 宗成
まのあての 宗成
夕陽の蚊のあての 宗成
あての蚊のあての 宗成
の蚊のあての 宗成

蚊乃夢八つらふまはれ姑亦 心盡
の蚊くす針様くくみゆる草押 草乳
名もひらたけ指のまはれ蚊の
し畫八つらふの八蚊はれ蚊の代 草乳

蟬

夏はあふあふ虫まとも草 草放
鳴くく草りくく草り草 草乳
地虫くく草りくく草り草 草乳
衣着くく草りくく草り草 草乳
風薫る指乃様もまはれ 草乳
夢あつくく草りくく草り草 草乳

生縮そとらふき物も様も 草乳

水鶏

波うてたたきくくくの水鶏 草乳

鶺鴒

夢もあふくく草りくく草り 草乳
此くく草りくく草りくく草り 草乳
草りくく草りくく草りくく草り 草乳

鮎

鮎あふくく草りくく草り 草乳
草りくく草りくく草りくく草り 草乳

なほつゝ 薺の根も花の 重伝

菖蒲

引分つてあつた草は菖蒲 七葉上 西交
菖蒲の刀みれは花も波のうら 水 宗派
菖蒲の刀みれは花も波のうら 水 宗派

水草花

まをやんてふふのびの花のわが 傳ま
水もよもきほきもきつらたの良 片葉

あ竹

醍醐子あつら

醍醐子あつら いごご 醍醐子あつら いごご

あつら いごご 醍醐子あつら いごご

あつら いごご 醍醐子あつら いごご

あつら いごご 醍醐子あつら いごご

あつら いごご 醍醐子あつら いごご

あつら いごご 醍醐子あつら いごご

あつら いごご 醍醐子あつら いごご

あつら いごご 醍醐子あつら いごご

あつら いごご 醍醐子あつら いごご

あつら いごご 醍醐子あつら いごご

あつら いごご 醍醐子あつら いごご

雨あけ竹の子たけ地蔵堂 徳義
 竹田あり竹きゆかんの里子か 同
 上野ぐらよはひのき竹の子たけ 氏平
 おとよはひのけしるもや井田家 利清
 竹の子とぬきぶもやたけか 光三
 多竹の松葉や面ぐ人教へん 定母
 萩野の子とよぶやふ月常 重吉

早苗

知くそほきまは早もまか 光三
 上る田の海日と傳よ彌多 徳元

五月雨

青あつはらまほや沖のふ 昌義
 五月雨六塔の庭ある水も 乃美
 青あつ河内とありぬほ 三礼
 青あつ地やまけり 浪河 与三
 青あつやえ杭とまはる松 一
 青あつや一はふゆめ天下 孝友
 青あつ観音も水鶏 貞盛
 青あつやぶき万井川板 定三
 五月雨の雉や鶯のけり 正章
 五月雨やまけり 徳と川 西別
 五月雨のむらやうも 芳里 徳

わらわのまをばつすよすよこ 重方
 中月曲之内人あな人し 正利
 あるる国もいふれの板をが 威政
 志やこづねうれしるやわさ 老を
 五月曲ハ枚とらけしはる茶 弘永
 五月曲ハ真木にのちみか 海友

梅雨

高自れ多もげふ蘇漢梅の五 穴康
 芳はあびぬあもむじめろぬ 主直

喜梅

あつめる梅やまき物よこのと 直方

持かろつ交をびくれ松法 弘永
 梅許をひききつみあり梅法 敏勝
 古風くろやう水いんふ梅法 辨
 老まなるも編自れ梅法 徳意
 大少方あるま梅の暦う那 昌

徳夜

徳夜をのりいんる物法 忠也
 乃一其ハ実行の子母ふハ 心武
 骨写るもまはあをるを 忠隆
 まはあはるもまはあをるを 主供

夏月

夏月乃月入る稲や毛の 船の
雲海を八かしなまられたる月 正
月末の月入るはまらる船外 日
めぐる事日足るは月 室二
徳おはさるもたはよ月の舟 正次
徳来はらりもわは月舟の舟 室二
月入る船のめぐるは船車くれ 室二
津月かぐとれは月舟の舟 室二
ゆらめく遊るは月舟の舟 室二
くけやこころん月の舟 室二
空の海のももるは月舟の舟 室二

祭

舟あはるは馬もくもは林 肥
舟あはるは馬もくもは林 肥
月津の舟あはるは山乃舟の舟 室二
舟津の舟あはるは山乃舟の舟 室二
六月十日の江戸山王神事

舟あはるは馬もくもは林 肥
舟あはるは馬もくもは林 肥
舟あはるは馬もくもは林 肥
舟あはるは馬もくもは林 肥
舟あはるは馬もくもは林 肥
舟あはるは馬もくもは林 肥
舟あはるは馬もくもは林 肥
舟あはるは馬もくもは林 肥
舟あはるは馬もくもは林 肥
舟あはるは馬もくもは林 肥

舟あはるは馬もくもは林 肥
舟あはるは馬もくもは林 肥
舟あはるは馬もくもは林 肥
舟あはるは馬もくもは林 肥
舟あはるは馬もくもは林 肥
舟あはるは馬もくもは林 肥
舟あはるは馬もくもは林 肥
舟あはるは馬もくもは林 肥
舟あはるは馬もくもは林 肥
舟あはるは馬もくもは林 肥

大和ゆもろもかゆりまの 道元
○ぬれ物そろよりくしん 弘永
はつと志ふひらるも金まら 道安
垣うち八只娘尻の房うね 徳宗
各小めでくらしる計えぬ娘尻 同
はるふり、素八娘尻のうきか 徳元
○美もいして竹はすもも 志敵

書貞

むらうかと素舞あふもひか 弘永
○書貞も猫の目しきれた登 正徳

夕顔

夕顔の花でけいけいなる 弘永
○夕顔のひらひらむく 弘永
目なけしあ夕貞さうし 弘永
夕顔の花でけいけいなる 弘永

道

道元

道元
○道元もいそいでいそいで 弘永
道元もいそいでいそいで 弘永

人の母の道

母の道
○母の道 道元
感かんく胸のひらる道元 弘永
んるんまえおきつものまき 弘永
花の神のわらわらまき 弘永

蓮のちと露あかし佛の露 昌言
るる一頁のちも露なる蓮の露 昌言
たほしくみよなき乃佛也 昌言

海老

海老のちと露あかし佛の露 昌言
るる一頁のちも露なる蓮の露 昌言
たほしくみよなき乃佛也 昌言

白雨

夕らけのちと露あかし佛の露 昌言
るる一頁のちも露なる蓮の露 昌言
たほしくみよなき乃佛也 昌言

夕らけのちと露あかし佛の露 昌言
るる一頁のちも露なる蓮の露 昌言
たほしくみよなき乃佛也 昌言

扇

何事も解のかけの初自承 法元
非見海なる解の地は云 玄礼
六月の昔の解の地は云 啓
六月の二親骨を信する 貞感
六月の解の地は云 啓
六月の解の地は云 啓
六月の解の地は云 啓
六月の解の地は云 啓
六月の解の地は云 啓
六月の解の地は云 啓
六月の解の地は云 啓
六月の解の地は云 啓

六月の解の地は云 啓
六月の解の地は云 啓
六月の解の地は云 啓
六月の解の地は云 啓
六月の解の地は云 啓
六月の解の地は云 啓
六月の解の地は云 啓
六月の解の地は云 啓
六月の解の地は云 啓
六月の解の地は云 啓
六月の解の地は云 啓
六月の解の地は云 啓
六月の解の地は云 啓
六月の解の地は云 啓
六月の解の地は云 啓

四十五

納涼

夏まての汗をまがらけゆるが
涼のさゆと入れば松尾山
日よちもさゆあつた汗拭
はあつたまらぬ油のき
このあつたあつたあつた
汗あつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
暑さなまはあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

勢別山田のりまよりの

夕涼のりまよりのりまよりの

舟乃帆やきも涼きた定時
あつたあつたあつたあつた
川がくえ涼とれあつた
信あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

涼小坂

夏と秋あつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

白泉

あつたあつたあつたあつた

雜夏

夏草此後かきの志こころに大相おほい 京葉

春可あき遊あそびる

薰かほ牙はるは津つ六むのの便たりきる

母ははのの道みちをたるます

○のくのぶの波なみのの袖そではは用もち平ひら日ひ

一またたららむももも山やまあの津つ元もと

米こめのの湯ゆももはは滋し養やうをを捧たげます

孝たかぶらへた國くにももこころろくく糖にがはまま久く

土つち角かく子こ入い日ひ蒜にのの根ねををたたぐぐ

○書かき深ふか毒どくのの丹に指さらら又また葉はのの春はる

梅うめ月つき空そらののりりれれ

小こははららりりををななままららるる

一いちちをを平ひら

云いふふのの事ことりりのの神かみのの形かたちはは何なに

はは世よのの年としやや後あとのの事こと

とと伊い人ひと作つく

早はやににははれれ白しろ

夏なつのの心こころをを平ひららら

